

隠の山を今日か越ゆらむ

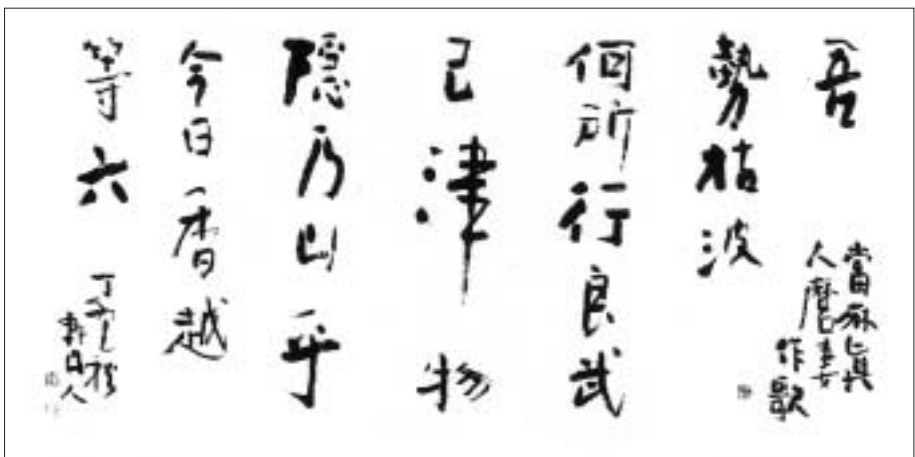
持統天皇の行幸と万葉歌

1 『万葉集』は全部、漢字で書いてあり、仮名がまだ無かった時代で漢字の音を借りて国語をあらわした。そのため、読解は、難渋を極めたが、鎌倉時代の仙覚、江戸時代の契沖、賀茂真淵、本居宣長、鹿持雅澄などすぐれた字者が研究を重ね、さらに近代の万葉学者の調査によって、いまでは案に読めるようになった。

2 仙覚本及び同系統本の訓、本居宣長『万葉集玉の小琴』、日本古典文学全集本、和歌文学大系本、新日本古典文学大系本など。なお、契沖は「いつもの」繁藻の「(『万葉代匠記』)賀茂真淵は「おきつもの」奥つ物「(『冠辞考』)鹿持雅澄は「おきつもの」奥(水底)つ藻の「(『万葉集古義』)説をとる。

3 石垣謙一「己津物考」、澤潟久孝『万葉集注釈』、日本古典文学大系本、『時代別国語大辞典 上代編』。

4 仙覚以前の古写本古訓、西宮一民「己津物」(おきつもの)考。



万葉歌(上出軒山書)

『万葉集』には「隠」(名張)を詠み込んだ歌が三首収められています。三首のうち二首は、持統天皇の東国行幸の際に詠まれた歌です。一首は持統天皇六年(六九二)三月の伊勢行幸、いま一首は讓位後の大宝二年(七〇二)十月の三河行幸時のものです。

名張は畿内と畿外の境に位置し、東国への入口に当たっていましたから、飛鳥浄御原宮や藤原宮(持統天皇八年(六九四)十二月以降)から伊勢や三河への道は、名張を通っていました。ここでは持統天皇六年(六九二)の伊勢行幸の際の歌のみを紹介しましょう。

当麻真人麻呂妻作歌

吾勢枯波 何所行良武 己津物

隠乃山乎 今日香越等六卷一四三

これと同じ歌が、『万葉集』巻四には、

幸伊勢国時、当麻麻呂大夫妻作歌一首

吾背子者 何處将行 己津物

隠乃山乎 今日歎超良武(巻四・五一)

とあります。伊勢国への行幸に従駕した当麻真人麻呂の妻が歌ったものです。当麻氏は主に継体天皇以降の天皇近親の後裔氏族で、天武天皇十三年(六八四)十月に八色の姓の筆頭である真人姓を賜りました。「大夫」といいますから、おそらく令制の五位相当の位階を

帯びていたかと思われませんが、麻呂の事蹟の詳しいことは分かりません。この行幸に宮都を守る「留守官」に任じられた一人に同族の当麻真人智徳がいますが、留守官は有力な官人が任命されるのが例でした。

この歌は、古くから多くの人々に愛誦された万葉歌の一つであり、殊に名張市民にとって馴染み深いものがあります。名張駅前に建つ万葉歌碑には、佐々木信綱氏の揮毫で「吾せこはいつく行くらむ於己都藻の名張の山を今日かこゆ良舞」と刻まれています。「わが夫はどの辺りを通っているのであるうか、名張の山を今日あたりは越えているであろうか、都にあつて夫の旅路を想う真情が素直に伝わってくる歌です。

「隠」は大和よりみて山陰に「かくれひそむ」の意、動詞ナバル(隠れるの意)の連用形ナバリと同音なので地名にかけたものですね。これを「隠」ではなく「隠(名張)」と訓むことは本居宣長が唱えて以来の定説ですが、その枕詞である「己津物」には諸説がありますが、そのなかで今日最も有力なのは、

「おきつもの(沖つ藻の)」

「おきつもの(奥つ物)」

の両訓です。

は「己津物」で、「己」は「棄く」の連用形オキを「沖」の借訓に用いたもの、は「己津物」で、「己」は「起く」の終止形で、

そのオクを「奥」の借訓に用いたものという理解です。沖の藻は水底に隠れて見えないし、奥の物も文字通り隠れてみえないから、「隠」にかかる枕詞として意味上きわめて妥当です。しかしいずれも『万葉集』の借訓に例のない特異な用法です。そこで、古訓を尊重して、「己」ではなく「己」が本来の字とし、「己津物」のおのづもの(自分自身に内在するもの)という新説もあります。己自身に内在するものという思弁的な発想が、果たして万葉人にとって自然であったか、新説にも疑問がないわけではありません。要するに、国語学の世界では、一般に知られる「沖つ藻」で必ずしも一定しているわけではないのです。

ところでこの持統天皇六年の伊勢行幸は何を目的に行われたのでしょうか。天皇は、生涯に四八回にのぼる大小さまざまな行幸をされましたが、その目的は必ずしも明白ではありません。特にこの度は、中納言三輪高市麻呂が「農時を妨げる」との理由で、二度にわたり職を辞して諫言したのにもかかわらず、強行されたものでした。三月六日に出発し、

伊賀を通り、伊勢・志摩を巡り、二十日には飛鳥浄御原宮に帰還しています。その間、伊勢の神郡や伊賀・伊勢・志摩の国造らに冠位を与え、調役を免じ、到る所の民衆との交流をはかり、困窮者に稲を賜り、囚人を釈放するなどの仁政を施しています。また、この行幸には近江・美濃・尾張・三河・遠近五国の騎士が供奉しています。これには護衛という目的を超えたものしさがあります。単なる物見遊山でも儀礼的色彩をおびたものでなく、一種の政治的行動や軍事的示威行動の意味も含まれていたのではないかとみられています。

この歌が行幸の帰路を想定して歌われたとすれば、明日には無事使命を果たした夫に逢えるという妻の思いが、一層強く伝わってくるものがあります。『万葉集』は今も愛読される古典の一つですが、それは千数百年を隔ててどこかに帰すべき心の拠り所を発見するからでしょう。

(清水 潔)